

日本の看護学教育における教育方法の現状と問題 —1994から1997年の看護文献からの検討—

稲垣美智子 松井希代子 加藤真由美

KEY WORDS

Nursing Education, Educational Skill

はじめに

近年、高等教育における教育方法改善の必要性が提唱されている。看護教育では、1989年に保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部が改正され、1990年から新カリキュラムが施行された。そして看護教育が4年制大学教育へと急速な勢いで移行され、1991年に11であった4年制大学は1996年には49、1997年には54となった。その背景には膨大化する医療情報・医療の高度化、多様化する健康に関するニーズ、看護学の国際化があり、これらへ対応できる人材育成のための教育への期待と関心が高まったものと考えられる。

このような状況下で、学生に何を教えるかの検討はもちろんであるが、どのように教えるか、つまり効果的な教育方法の開発や検討が重要な課題となっている。しかしこの領域での検討は未だ十分とはいえない¹⁾²⁾³⁾。教育方法を一層開発・発展させていくためには、現在の教育技術に関する動向の概観が必要と考える。そこで本研究では、教育方法改善の必要性が提唱されている近年の看護に関する文献を、教育の視点から分析・分類し、看護教育方法の現状と問題を導き出すことを試みた。

研究目的

わが国における看護教育に関する文献から看護教育方法の分類を行い、現状と問題を導き出すことを目的とした。

研究方法

1 研究対象

分析対象文献は、1994年から1997年4月の間に刊

行され、医学中央雑誌に登録された看護に関する文献8300件のうち、看護系学校での教育について執筆された1431件である。

文献抽出にあたっては、看護、看護教育、教育・指導、教育方法、教育技術をキーワードにして行った。そこから抽出された文献から看護教育の割合を算出し、その中に占める大学、短期大学、看護専門学校を含む看護系学校での教育、卒後教育、その他に、年代ごとに分類し特徴をみた。その他とは両者に分類できないものとした。

2 分類および方法

文献のテーマを中心に目的、内容、対象、結果あるいはまとめについて一件ずつ記述し、類似するものをカテゴリーにし、年代別にその数の推移をあらわし動向とした。

3 用語の定義

看護教育方法：看護に関する学習過程を促進・支援するという目的のために用いられる方略のこととした。

結 果

キーワードとして「教育方法」「教育技法」という登録はなかった。「看護」のキーワードでは年代順に2602件、2157件、2865件、「看護」「教育」つまり看護教育に関するものは1994年には754件（全体に占める割合29.0%）、1995年855件（39.6%）、1996年1336件（46.6%）と年々総数および看護教育に関する文献の割合が増加していた。またその中の看護系学校での教育が占める割合はどの年代も40-48%程度、卒後教育は20-30%であった。一方学校教育と卒後教育の関連を共同してとりあつかっているも

Table 1 Number of articles about nursing education for from 1994 to 1997. Number (%)

Year	Nursing	Nursing education	Nursing education in school	Over graduate nursing education	Other
1994	2,602 (100)	754 (29,0) (100)	329 (43,6)	229 (30,4)	196 (26,0)
1995	2,157 (100)	855 (39,6) (100)	348 (40,7)	218 (25,5)	289 (33,8)
1996	2,865 (100)	1,336 (46,6) (100)	592 (44,3)	268 (20,0)	476 (35,6)
1997	676 (100)	338 (100)	162 (47,9)	86 (25,4)	90 (26,6)

*1997: 1997, 4 present

Table 2 Number of articles about educational areas from 1994 to 1997. Number (%)

Year	Total number	Clinical practice	Lecture	Drills in school	Small Group	Other
1994	329 (100)	150 (45,6)	66 (20,1)	25 (7,6)	15 (4,6)	73 (22,1)
1995	348 (100)	206 (59,1)	39 (11,2)	24 (6,9)	10 (2,9)	69 (19,2)
1996	592 (100)	267 (45,1)	84 (14,2)	75 (12,7)	7 (1,2)	159 (26,9)
1997	162 (100)	54 (33,3)	27 (16,7)	11 (6,8)	2 (1,2)	68 (42,0)

Table 3 Number of articles about the subject of nursing educational study from 1994 to 1997.

Number (%)

Year	Total number	Student	Instructor	Student-Instructor	Other
1994	329 (100)	114 (34,7)	126 (38,3)	8 (2,4)	81 (24,6)
1995	348 (100)	165 (47,4)	121 (34,8)	6 (1,2)	56 (16,1)
1996	592 (100)	216 (37,8)	247 (47,1)	14 (2,4)	52 (8,8)
1997	162 (100)	76 (46,9)	44 (27,2)	9 (5,6)	33 (20,3)

のはなかった。また、その他では分類が困難な、例えば看護に関する知識提供を主眼にしたものを分類した。(表1)

それぞれの年代の看護教育に関する文献のうち、教育方法の視点からの分類では、教育形態別分類、教育対象別分類、患者特性別分類、その他に分類された。

1. 形態的分类 (表2)

教育形態的分类には、実習、授業、学内演習、小グループ教育、その他の5つにカテゴリー化された。どの年代においても実習についての教育の文献が占める割合が最も多く、次いで授業、学内演習、小

グループの順であった。小グループは1994年4.6%、1995年2.9%で、1996年と1997年とも1.2%であった。実習では、患者理解効果、専門職意識の形成などで実習すること自体がもたらす効果を述べるものが多かった。また授業、学内演習では教育方法の工夫、評価方法の検討を述べたものが多かった。特に患者と看護者の関係の深まりを題材にしたものが多い特徴があった。

2. 対象別分类 (表3)

ここでの対象とは、研究の対象をいうもので、学生、教師、学生と教師、その他の4つにカテゴリー化された。学生では学生の特性に関するもの、教育

Table 4 Number of articles in Classification of special areas from 1994 to 1997. Number (%)

Year	Total	Basic	Adult Geriatric	Maternal	Pediatric	Psychiatric	Community	General	Other
1994	329 (100)	56 (17.0)	57 (17.3)	24 (7.3)	18 (5.5)	23 (7.0)	14 (4.3)	115 (35.0)	22 (6.7)
1995	348 (100)	45 (12.9)	46 (13.2)	22 (6.3)	35 (10.1)	21 (6.0)	19 (5.5)	126 (36.2)	34 (9.8)
1996	592 (100)	123 (22.5)	71 (12.0)	45 (5.9)	35 (5.9)	29 (4.9)	14 (2.4)	174 (29.4)	101 (17.1)
1997	162 (100)	21 (13.0)	18 (11.1)	13 (8.0)	6 (3.7)	3 (1.6)	5 (3.1)	47 (29.0)	49 (30.2)

効果を学生の習得度で述べたもの、自己評価についての因子についてが多く、教師では、実習や授業方法の検討が多かった。学生と教師では両者の関係から述べており、小グループでの相互関係を中心としていた。

3. 患者特性別分類 (表4)

ここでの患者特性とは、看護をする対象の想定をどんな患者あるいはクライアントにしているかというものである。基礎、成人・老人、母性、小児、精神、コミュニティー、共通一般、その他にカテゴリー化された。1996年の基礎、1995年の母性に他の年代より割合が多く、共通一般は1996年に減少を示し、精神は年々減少傾向を示した。それ以外のカテゴリーは年代ごとの割合はほぼ一定していた。

考察とまとめ

形態的分類では、実習に関するものが多く学生が患者と接する体験自体の効果をねらったものであった。さらに患者、看護者関係の形成を重要視する傾向が見出された。しかし一方で学生、教師の相互の学習プロセスからの検討は少なく、学生の達成感により評価することが多いことも明らかになった。このことは学生の体験を教材化するという今日的な教育方法の重要性⁴⁾からみると納得のいく結果であるが、そのプロセスに教師自身が、どのような教育方法を用いるか、また有効性を学生の達成感以外に評価する方法の検討が必要であることが示唆された。

また小グループの教育方法についての文献が少なく、授業の文献が多いことは、1クラスの学生数が多い現状で、教師が近年推奨されている小人数性の導入に困難さを感じていることも推測された。授業の文献では教育方法の工夫を報告しているものが多

く、評価が今後期待される。

対象別分類では、学生の特性についての文献が多く教師、学生の両者間の教育・学習プロセスについての文献が少なかった。このことは、プロセスを記述することの研究方法が、他の学問領域から比較すると看護学では体系化が遅れているとの指摘もあり、その影響が大きいことが推測された。看護学は学生の自己洞察や看護の専門性を高めるといいうわゆる心理的な成長が要求される学問でもある。その達成のためにも、教師の教育的働きかけによって生じる学習プロセスを説明する概念を明らかにする取り組みが必要であると考えられる。

患者特性別分類では、基礎が若干増加の傾向があった。このことはカリキュラムの改正に影響されていると考察した。医療の高度化や人口動態が大きく変化する中、学校における教育内容は看護に共通した概念を教育することが望まれ、そのことが結果に反映されたと考えられる。今回の調査では明らかにできなかったが、卒業教育との連携や関係を検討していくことが今後、必要であると思われる。

最後に本調査の限界は、対象が医学中央雑誌に掲載された文献に限定したことである。

文 献

- 1) 鈴木純恵他：わが国の学会抄録にみる看護技術教育の研究現状の分析、自治医大紀要、15-22, 1995。
- 2) 舟島なおみ他：米国の博士論文にみる看護学教育の現況—研究デザイン、研究内容に焦点をあてて—埼玉医科大学短期大学紀要、(4)41-51, 1993
- 3) 安斎由貴子、舟島なおみ：わが国における看護学教育研究の現況分析—過去2年間の学会誌から—、第24回日本看護学会収録(看護教育)、104-106, 1993
- 4) 舟島なおみ他：過去5年間の看護学教育研究の動向と今後の課題、看護教育、35(5)、395, 1994

**The Trend Problems of Educational Skill in Japanese Nursing Education
—Japanese article Which were published 1994-1997 —**

Michiko Inagaki, Kiyoko Matsui, Mayumi Kato